

2014年11月21日

◇地方共助社会づくり懇談会in群馬・基調講演2◇

# 共助社会を支える担い手づくり

**水谷 綾**

社会福祉法人大阪ボランティア協会事務局長  
内閣府共助社会づくり懇談会委員

# 共助社会づくり懇談会の趣旨

- 公助について財政上の制約がある中、地域の課題に対応と活性化には、共助の精神によって、人々が主体的に支え合う活動を促進する
- 担い手は多様化しており、これまで地域社会において重要な意味を持っていた自治会、消防団、商店街等のみならず、
- 現在は特定非営利活動法人、公益法人、企業等様々な主体が参加している。こうした多様な担い手の更なる参加や活動の活発化を促す仕組みを検討していくこと

# 共助社会づくり懇談会の趣旨

- ①人や組織のつながりがしなやかな強さを持つ安定した社会の構築に寄与すること
- ②地域を活性化するために、新たな市場の創出・拡大、雇用の拡大、寄附文化の醸成に寄与すること

- ◎すべての人の様々な形による参加を促進
- ◎全員が何かの担い手になれる可能性、そして、そうなってほしい期待

# 大阪ボランティア協会の 東日本大震災時の支援の動き

緊急時

復旧時

復興時

復興・発展期

発災

11年3月 5月 7月 9月 11月 12年1月 春 夏 秋 冬 13年 春 夏

被災地支援

情報発信

運営支援者派遣

コーディネーター派遣

NPO基盤強化コンサル、VCO研修等

物資支援

人的支援Vバス

バス

学習・情報提供

復興応援イベント

復興応援イベント

避難者支援

紀伊支援

災害時のVCOカアップ研修

岬町災害研修

支援センター間の勉強会

ネットワーク検討

報告、記録化

災害支援

# 大阪ボランティア協会 様々な災害支援の取り組み



## ■ 新宮市災害ボラセンに コーディネーター派遣

災害ボランティアセンター（V C）運営支援者派遣や  
大阪からのボラバス運行企画

■ わかやまN P Oセンターとの連携から始まった活動

## ■ 以降も様々な災害への支援活動を継続

2014年8-9月：広島市の土砂災害。安佐南区災害V C運営支援。

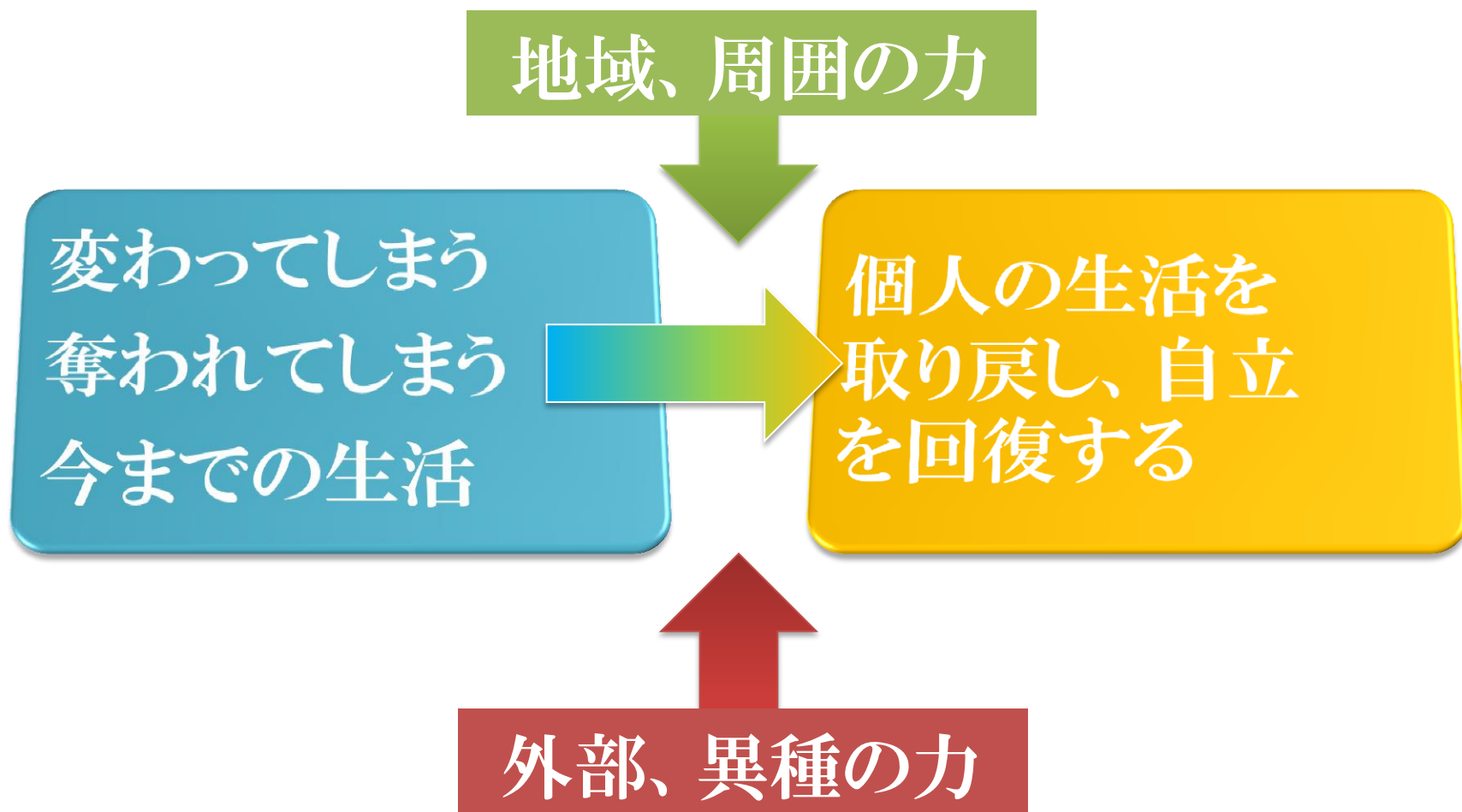
協会職員他、運営支援ボランティアとともに、センター後方支援活動

2013年9月：滋賀県高島市水害。災害V Cの後方支援および復旧活動

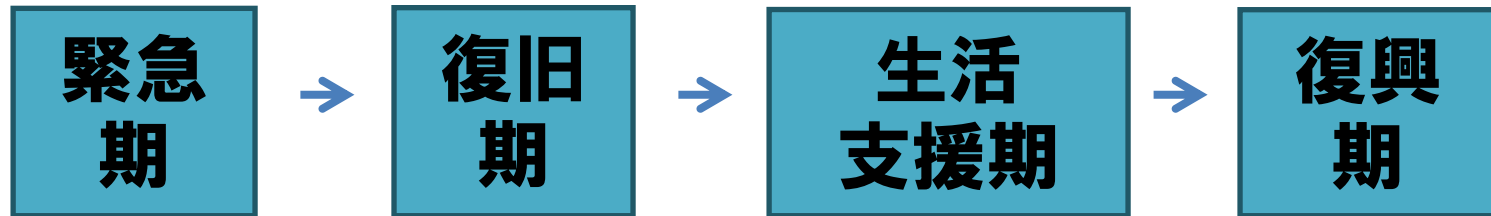
2012年8月：京都府宇治市水害。災害V Cの後方支援活動

2012年8月：福岡県登米市水害。災害V Cの後方支援活動

# 災害時、何を失い、何を得るのか



# 災害発生後、起こること



- ◎ 災害発災以降は、とにかく変わる、激動の日々
- ◎ 地域の動きも支援の有りようも「非定型」
- ◎ 災害の種類、規模、発生時期により様々な事態が

# 災害発生後、起こること



◇発災後～72時間程度

主に自助による安全確保、周辺確認

そして、周囲互助による助け合いが行われる時期

つながりの中で動く

## 状況把握・混乱、感情的不安

- ・ 生命・安全の確保
- ・ 周囲の状況確認
- ・ 混沌、混乱
- ・ 不安・不信感



# 緊急期は、見えない、見通せない

- 緊急期は、目の前の対応が最優先。被害状況やニーズなど**全体の状況把握が困難**に。
- 周りのことが見えにくくなりがち。また、情報が錯綜し、何を信じてよいのか分かりにくくなる。
  - 自分たちだけでやりきろうとする傾向が強くなる。**
  - 心理的に外を受け入れる余裕がない（内向的）。**
- 大規模災害時は、何もかも不足する。それぞれの立場でできることがミックスされていく方が、**復旧・復興のスピードは、加速する。**
  - 各々は多様な関わり。仲違いが起こることも。
  - このスタンスによって、復興期以降が代わり、**地域の一体感につながったり、地域再生に結びつくことも。**

# 災害発生後、起こること



◇数日後から1～2ヶ月（災害規模による）  
災害によりダメージを受けた地域の被害状況を改善し、  
様々な力を借りて、元に戻していこうとする時期

## 混乱継続、全体像が見え出す

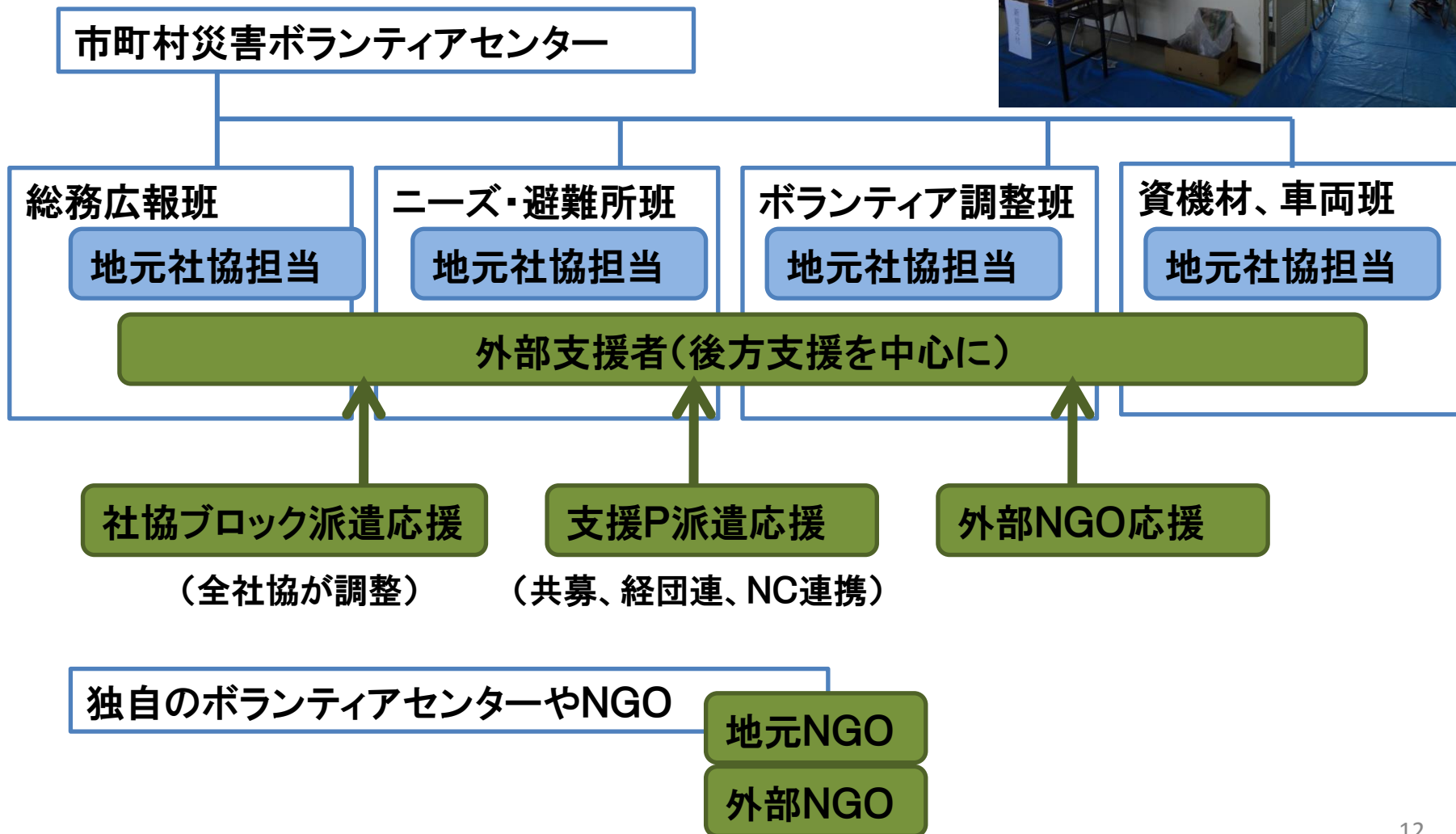
外部の  
力を借  
り動く

- ・ 状況把握の上での判断力
- ・ 周囲との比較、横並び状態
- ・ 新たな不安・不信感
- ・ 異質なもののとの向き合い

# 7つの「受援(じゅえん)力」

- ① ボランティア活動経験があり特徴を知っている。
- ② ボランティアの受け入れ方を知っている。
- ③ ボランティアがどういう活動をするのかを知っている。
- ④ NPO・NGO活動の特徴を知っている。
- ⑤ 公的機関や民間機関に対しての助けの求め方、  
依頼の仕方を知っている。
- ⑥ 災害ボランティアセンターの活用法を知っている。
- ⑦ ボランティアとの付き合い方を知っている。

# 災害ボランティアセンター



# 外の「関わろうとする力」を生かす

- ◎ 泥だし・お掃除・家財道具の搬出、片づけ、物資整理
  - ▣ 快適な生活環境を少しでも早く
- ◎ 炊き出し・給水・介助・介護
  - ▣ しんどさを少しでも楽に
- ◎ 足湯・喫茶・マッサージ・環境改善
  - ▣ 交流、対話の付加価値も
- ◎ 学習支援 など
  - ▣ 子どもの目線から非常時を見つめる
- ◎ 事務、コーディネート・サポート
  - ▣ 支える人を支える態勢（経験値）

# 災害発生後、起こること



◇地域再生のために動く時期（数ヶ月～約1年）  
それぞれの暮らしを取り戻すために、ニーズが多様化に合わせた立て直しを通じて、新たな地域づくりが始まる時期

地域内  
での支  
えあい

## 個別性、自立性⇨回復へ

- ・ 自立観、独立に対する価値観
- ・ 社会性や経済性の確保
- ・ 新しい関係の中の不安と期待
- ・ 情報収集
- ・ 自信の回復に向けて

# 災害発生後、起こること



◇時期（半年、約1年から数年かけて）

災害時に得た経験、取り戻したものによる新しい関係や再生に向かう地域の中で、新しいまちづくりを

新しい  
まちづ  
くり力

## 地域の再生にむけて

- ・新しい関係の中で、新たな自信の回復
- ・チャレンジ精神
- ・情報収集、復興の発信
- ・安定期から日常化へ（風化の不安）

# 非常時は、平時の動きが生きる

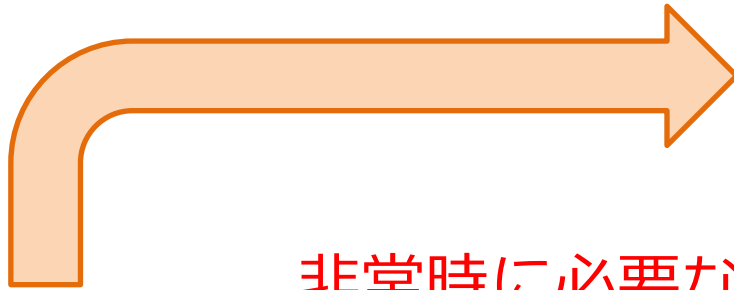
- ①地域の危険個所、避難場所、福祉避難所を知っている。
- ②地域に顔見知りや、相談できる相手がいる。
- ③災害時に手伝ってもらえる人を知っている。  
(自治会・町内会、民生委員・児童委員、  
社会福祉協議会、市区町村役場など)
- ④自分のまちの地域防災計画を知っている。
- ⑤要援護者の状況把握・避難対策ができています。
- ⑥地域福祉活動をはじめとする日常の地域のボランティア活動が活発である。
- ⑦災害ボランティアの受け入れ・協働のノウハウを知っている。



# 非常時は、平時の動きが生きる

- 非常時は、日常の関係性がそのまま生きる。  
(顔の見える関係。携帯電話をかけられる関係)
- 各地域で、非常時には「具体的に何をするか」を、  
想定しておくことが大事。
- 非常時は、基本的に「想定外」が8割。状況に応じて臨機応変に考える時に、想定した内容以上に、  
想定を「考えた経験」が役立つ。
- 訓練や研修、イベントなど、具体的な協働による  
成功体験を通じて、連携を深めるのが近道。
- 担い手の高齢化は共通の課題。若手層を巻き込んで、  
人材育成をし続ける。

# 非常時は、平時の動きが生きる



非常時に必要なことを、平常時の取り組みとして実施するのが“続ける”コツ。



- 例)
- ・ 環境イベント + 手作り食器をつくる
  - ・ 園児の遠足 + 近所の避難場所へ
  - ・ 高齢者の余暇活動 + 布ぞうり作り
  - ・ 児童の課外活動 + 持ち出し荷物づくり
  - ・ まち歩き + 災害の歴史をたどる

など

# 非常時は、平時の動きが生きる

	人材	資機材	資金	情報	環境 つながり
地域					
社協					
NPO 福祉施設					
ボラン ティア					
企業 事業主					
行政					

# ありがとうございました。

もっと知りたい、相談したい！という方は

...

大阪ボランティア協会

検索

office@osakavol.org

